

山と向きあう

狐っこ一匹歩くよな…

だいたいあの、朝にさ、吉岡さ下がって。晩方、雪いっぺえあつとこのさ、人歩く、狐一匹歩いてったような跡っこや、ズアーッと、低うなってるばんで。ちょうど、狐っこなんか歩くよな、雪の跡っこばりだもん。まあつつぐにや。ちょうど、あんた歩った跡、それっきりだもん。追付〔かつ〕ぐも超越〔とっこ〕すも、しらんねえから。ああ、淋しいような、ほんとに悲しいような。そゆよなとこ歩いて、用足して食ってたんだからさは。想像つかねんだ。

(『升沢にくらす』 P.268)

木が凍みる

うん、うんど、冬のしばれる日は、木もバーンと割れだりなんかすっからね。そういう音するのね。ここはあんまりそういうなの、そうはねえからね。ここはね、本当のいい木ばんだもんね。そういぐしで、凍(し)みで割れるような木は、素柄(すがら)のいいのさあ。凍みでいぐ木だから、木もいいのね。だから性骨(しょうぼね)の悪い木は割れねんだ。ごにゃごにゃごにゃと曲ったりなんかするのは、そういう木は割れねえ。「(お前は)凍み割れもなにもしねえから、大丈夫だ」なんて。

(「木が凍みる」 p.220)

山の中の迷い易い場所

狐にだまされたつつよりもね、あれは、おれもお、何十年と行ってつとご、ここが裏山だけども。あのね、迷うつつうのが、狐でなく、錯覚で。

あのちょっとした土盛りをね、クルッと廻って行くと、方向がまるっきり分がなくななる場所あ、あんですよ。それがすっかり覚いければ、「ああこうだな」つつうこど、分がつけくども。うん、分がなくななる。それはここがね、一箇所ある。みんながどうかは、分がないけくども。ここが後ろの川、ザアーッと流れてますよね。ええ、ほして、ほれの反対に、あの向こう側さ、着弾地あんですよ。そごの方さ行くべと思って、その山を降って、ほっちさ行つたつもりしてんだけくども、川はまるきりこっち、着弾地はこっちなんだけくど、その山一周り廻とお、どっか、分かんねえけくど、川の方さ来るわけね。戻んの。だからね、おれも、ずいぶん長く歩つたけくども、「なんでこの箇所こうなんだべなあ」と思って、よぐよぐなんしたら、ちょっとした盛りねえ、こう廻〔ま〕ってしもうんですよ。これはね、おれもあすくの山だけは、三回だか迷つたけくども、ちょっとした加減なんです。だからそれを称して、「狐にひかさつた」って言うんでないかねえ。

これ狐でない。錯覚ね、山の。だれえ、しよっちゅう行ってつとこで、それなんだから、錯覚なんです。

(『升沢にくらす』 p.260)